

日蓮大聖人御書全集

とうたいぎしよう

当体義抄

とうたいぎしょう

当体義抄

文永 10 年 (73) 52 歳 最蓮房

と
みようほうれんげきよう

たいなにもの

問う。妙法蓮華経とは、その体何物ぞや。

答う。十界の依正、即ち妙法蓮華の当体なり。

問う。もししからば、我らがごとき一切衆生も妙法の

全体なりと云わるべきか。

答う。勿論なり。経に云わく「いわゆる諸法の乃至

本末究竟等」云々。妙樂大師云わく「実相は必ず諸法、諸法

は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土なり」

云々。天台云わく「十如・十界・三千の諸法は、今經の正しき体なるのみ」云々。南岳大師云わく「いかなるを名づけて妙法蓮華經となすや。答う。妙とは、衆生妙なるが故に。法とは、即ちこれ衆生法なるが故に」云々。また天台釈して云わく「衆生法妙」云々。

問う。一切衆生の当体即ち妙法の全体ならば、地獄乃至九界の業因業果も、皆これ妙法の体なるや。答う。法性の妙理に染・淨の二法有り。染法は薰じて迷いと成り、淨法は薰じて悟りと成る。悟りは即ち仏界な

り。迷いは即ち衆生なり。この迷・悟の一法、二なりといえども、しかも法性真如の一理なり。

譬えば、水精の玉の、日輪に向かえば火を取り、月輪に向かえば水を取る。玉の体は一なれども、縁に随つてその功同じからざるがごとし。真如の妙理もまたまたかくのごとし。

一妙真如の理なりといえども、悪縁に遇えば迷いと成り、善縁に遇えば悟りと成る。悟りは即ち法性なり。迷いは即ち無明なり。譬えば、人、夢に種々の善惡の業を見、

夢覚めて後にこれを思えば、我が一心に見るところの夢な

るがごとし。一心は法性真如の一理なり。夢の善惡は迷・
ゆめ ぜんあく めい

悟の無明・法性なり。

ご むみょう ほっしょう

かくのごとく意得れば、悪迷の無明を捨てて、善悟の
ほっしょう もと

法性を本となすべきなり。

大円覺修多羅了義経に云わく「一切諸の衆生の無始
だいえんがくしゅたらりようぎきょう い

の幻無明は、皆諸の如來の圓覺の心より建立す」云々。
げんむみよう みなもろもろ によらい えんがく ここる こんりゆう うんぬん

天台大師、止觀に云わく「無明癡惑、本よりこれ法性なり。

ちめい ゆえ ほっしようへん むみょう な うんぬん みょうらく

癡迷をもつての故に、法性変じて無明と作る」云々。妙樂

だいし しゃく い りせい たいな まつた むみょう よ むみょう

大師、釈して云わく「理性は体無く、全く無明に依る。無明

は体無く、全く法性に依る」云々。「無明は断ずるところの迷、法性は証するところの理なり。何ぞ体一なりと云うや」といえる不審をば、これらの文義をもつて意得べきなり。大論九十五の夢の譬え、天台一家の玉の譬え、誠に面白く思うなり。正しく無明・法性その体一なりといふ証拠は、法華経に云わく「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」云々。大論に云わく「明と無明と、異無く別なし。かくのごとく知れば、これを中道と名づく」云々。ただし、真如の妙理に

染・淨の二法有りといふこと、証文これ多しといえども、
華嚴經に云わく「心、仏および衆生、この三つは差別無
し」の文と、法華經の「諸法實相」の文とには過ぐべから
ざるなり。南岳大師云わく「心体に染・淨の二法を具足し
て、しかも異相無く、一味平等なり」云々。

また明鏡の譬え、真実に一二なり。委しくは大乘止觀の
釈のことし。また能き釈には、籤の六に云わく「三千理に
在れば同じく無明と名づけ、三千果成すればことごとく
常樂と称す。三千改むることなくして、無明即ち明な

さんぜん

つね

くたいいくゅう

もん

しゃくふんみょう

なり。

問う。 一切衆生皆ことごとく妙法蓮華経の当体ならば、
我らがごとき愚癡・闇鈍の凡夫も、即ち妙法の当体なり
や。

答う。 当世の諸人これ多しといえども、二人を出でず。謂い
ににん い

わく、 権教の人、 実教の人なり。 しかるに、 権教方便の
ねんぶつとう しん ひと じつきよう ひと
みょうほうれんげ とうたい い
ごんきょうほうべん

念佛等を信ずる人は、 妙法蓮華の当体と云わるべからず。

実教の法華経を信ずる人は、 即ち当体の蓮華、 真如の
じつきよう ほけきよう ひと
すなわ とうたい れんげ しんによ

みょうたい

妙体これなり。

ねはんぎょう

い

いつきいしゅじょう

だいじょう

しん

ゆえ

だいじょう

涅槃經に云わく「一切衆生、大乘を信するが故に、大乘

しゅじょう

な

もん

だいごうしょうじんぎょう

い

しゅじょう

によらい

の衆生と名づく」文。大強精進經に云わく「衆生と如來

おな

とも

いちほうしん

しようじょうみょうむひ

と同じく共に一法身にして清淨妙無比なるを、

みょうほつけきょう

しよう

もん

なんがくだいし

しあんらくぎょう

い

ほけきょう

妙法華經と称す」文。南岳大師、四安樂行に云わく「法華經

しゅぎょう

いつしんいちがく

しゅうか

そな

を修行すれば、この一心一學に衆果あまねく備わる。一時

ぐそく

しだいにゅう

れんげ

いちげ

しゅうかいちじ

に具足して次第入にあらず。また蓮華の一華に、衆果一時に

ぐそく

具足するがごとし。これを一乗の衆生の義と名づく」文。

い

にじょう

しようもん

どんこん

ぼさつ

ほうべんどう

なか

また云わく「二乗の声聞および鈍根の菩薩は、方便道の中

しだい しゅがく りこん ほさつ しょうじき ほうべん す
に次第して修学す。利根の菩薩は、正直に方便を捨てて
次第行を修せず。もしか法華三昧を証せば、衆果ことごとく
具足す。これを一乘の衆生と名づく文。
なんがく しゃく いちじょう しゅしよう な
南岳の釈の意は、「次第行」の二字をば当世の学者は
べつきよう りょうけん
別教なりと料簡するなり。しかるに、この釈の意は、
ほつけ いんがぐそく どう たい
法華の因果具足の道に對して方便道を次第行と云うが故に、
にぜん えん にぜん しょだいじょうきょう
爾前の円、爾前の諸大乗經ならびに頓漸・大小の諸經な
しょうこ
り。証拠は、無量義經に云わく「次に方等十二部經・摩訶
はんにや けごんかいくう と
般若・華嚴海空を説いて、菩薩の歴劫修行を宣説す」文。
ぼさつ りやつこうしゅぎょう せんぜつ もん

大強精進経の「同共」の二字に習い相伝するなり。法華経
に同共して信する者は、妙経の体なり。不同共の念佛者等
は、既に仮性・法身如来に背くが故に妙経の体にあらざ
るなり。利根の菩薩は、正直に方便を捨てて次第行を修せ
ず。もし法華経を証する時は衆果ことごとく具足す。これ
を一乗の衆生と名づくるなり。

これらの大乗の文の意を案するに、三乗・五乗・七方便・九
法界・四味三教・一切の凡聖等をば、大乗の衆生、妙法
蓮華の当体とは名づくべからざるなり。たとい仏なりとい

えども、權教の仏をば仏界の名言を付くべからず。權教
の三身は、いまだ無常を免れざるが故に。いかにいわんや、
その余の界々の名言をや。故に「正像二千年の国王・大臣
よりも、末法の非人は尊貴なり」と釈するも、この意な
り。

詮ずるところ、妙法蓮華の当体とは、法華經を信ずる日蓮
が弟子檀那等の父母の生みたるところの肉身これなり。
南岳釈して云わく「一切衆生、法身の藏を具足して、仏
と一にして異なり有ることなし。この故に、法華に云わく

ふぼう
『父母の生みたるところの清淨の常の眼・耳・鼻・舌・身・
意も、またかくのごとし』と文。また云わく「問うて云わ
く、仏、いざれの經の中に、眼等の諸根を説いて名づけ
て如來となすや。答えて云わく、大強精進經の中に衆生
と如來と同じく共に一法身にして清淨妙無比なるを、
妙法蓮華經と称す」と文。文は他經に有りといえども、
下文顯れ已われば、通じて引用することを得るなり。
正直に方便を捨てて、ただ法華經を信じ、
南無妙法蓮華經と唱うる人は、煩惱・業・苦の三道、法身・

般若・解脱の三徳と転じて、三觀・三諦即ち一心に顯れ、
その人の所住の処は常寂光土なり。能居・所居、身土、
色心、俱体俱用、無作の三身の本門寿量の当体蓮華の仏と
は、日蓮が弟子檀那等の中のことなり。

これ即ち法華の当体、自在神力の顯すところの功能な
り。あえてこれを疑うべからず、これを疑うべからず。
問う。天台大師、妙法蓮華の当体・譬喻の二義を釈し給
えり。しかれば、その当体・譬喻の蓮華の様はいかん。
答う。譬喻の蓮華とは、施・開・廢の三釈、委しくこれ

を見るべし。

み

当体蓮華の釈は、玄義第七に云わく「蓮華は譬えにあらず。当体に名を得。類せば、劫初に万物名無く、聖人理を観じて準則して名を作るがごとし」文。また云わく「今、蓮華の称は、これ喻えを仮るにあらず。乃ちこれ法華の法門なり。法華の法門は清淨にして因果微妙なれば、この法門を名づけて蓮華となす。即ちこれ法華三昧の当体の名にして、譬喻にあらざるなり」。また云わく「問う。蓮華は定めてこれ法華三昧の蓮華なりや、定めてこれ華草の

さだ

ほつけざんまい

れんげ

さだ

けそ

な

ひゆ

い

と

れんげ

ほうもん

な

れんげ

すなわ

すなわ

とうたい

れんげ

かん

じゅんそく

たど

か

すなわ

ほつけざんまい

れんげ

かん

れんげ

な

もん

い

いま

れんげ

かん

とうたい
な
う
るい

こつしょ

ばんぶつな
な

しょうにんり

れんげ

当体蓮華の釈

げんぎ
だいしち

い

れんげ

たど

れんげ

蓮華なりや。答う。定めてこれ法蓮華なり。法蓮華は解し難し。故に草花を喻えとなす。利根は名に即して理を解し、譬喻を仮らずして、ただ法華の解のみを作す。中・下はいまだ悟らず。譬えを須いて乃ち知る。易解の蓮華をもつて難解の蓮華に喻う。故に、三周の説法有つて、上・中・下根に逗う。上根に約せば、これ法の名、中・下に約せば、これ譬えの名なり。三根合論し、法譬を双べ標す。かくのごとく解せば、誰とために諍わんや」云々。

この釈の意は、至理は名無し、聖人理を観じて万物に

な つ とき いんがぐじふしき いつぽう あ な
名を付くる時、因果俱時不思議の一法これ有り。これを名づ
けて妙法蓮華となす。この妙法蓮華の一法に、十界三千の
諸法を具足して闕減無し。これを修行する者は、仏因仏果、
同時にこれを得るなり。聖人この法を師となして修行。
観道したまえば、妙因果俱時に感得し給うが故に、妙覺
果満の如来と成り給いしなり。

ゆえ でんぎょうだいしい いつしん みようほうれんげ いんげ かだい
故に、伝教大師云わく「一心の妙法蓮華とは、因華・果台
俱時に增長する当体蓮華なり。三周に各々当体・譬喻有り。
総じて一經に皆当体・譬喻あり。別して七譬・三平等・

じゅうむじょう ほうもんあ

みなとうたいれんげ あ

十無上の法門有つて、皆當体蓮華有るなり。この理を詮ず

おし

な

る教えを、名づけて妙法蓮華経となす」云々。妙樂大師云

しちひ

おのおのれんげ ごんじつ ぎ

たい

わく「すべからく七譬をもつて 各 蓮華の権実の義に對す

れんげ

じつ

ごん

ほどこ

べし〇何となれば、蓮華はただこれ実のために権を施し、
權を開して実を顯すのみ。七譬皆しかなり」文。

ごん
かい

じつ

あらわ

しちひみな

もん

また劫初に華草有り。聖人理を見て号して蓮華と名づく。

こつしょ
けそう

いんがぐじ
けそうあ

みようほうれんげ
しよう

に

ゆえ

な

この華草、因果俱時なること妙法蓮華に似たり。故に、こ

けそう
おな

れんげ
れんげ

な

すいちゅう
しよう

に

しゃく

の華草を同じく蓮華と名づくるなり。水中に生ずる赤

れんげ

びやくれんげとう
れんげ

れんげ

ひ ゆ

れんげ

け

蓮華・白蓮華等の蓮華これなり。譬喻の蓮華とは、この華

草の蓮華なり。この華草をもつて難解の妙法蓮華を顯す。

てんだいだいし

みょうほう

げ

がた

たと

か

あらわ

やす

天台大師の「妙法は解し難し。譬えを仮れば顯し易し」

しゃく

と釈するは、この意なり。

と

問う。劫初より已來、何人か当体の蓮華を証得せしや。

こた

答う。釈尊、五百塵点劫の当初この妙法の当体蓮華を

しようとく

証得して、世々番々に成道を唱え、能証・所証の本理を

あらわ

たま

顕し給えり。今日また、中天竺摩訶陀國に出世して、こ

れんげ

あらわ

の蓮華を顕さんと欲すに、機無く時無し。故に、一つの法

みつ

そうけ

ふんべつ

さんじょう

ごんぱう

ほどこ

蓮華において三つの草華を分別し、三乗の權法を施し

れんげ

ぎぎ ゆういん

しじゅうよねん

あいだ

しゅじょう

擬宜・誘引せしこと、四十余年なり。この間は、衆生の
根性万差なれば、種々の草華を施設して、終に妙法蓮華を
施したまわず。故に、無量義経に云わく「我は先に道場
菩提樹の下に乃至四十余年にはいまだ真実を顯さず」文。
法華經に至つて、四味三教の方便の權教・小乘の種々の
草華を捨てて唯一の妙法蓮華を説き、三つの華草を開して
一つの妙法蓮華を顯す時、四味三教の權人に初住の蓮華
を授けしより始めて開近顯遠の蓮華に至つて、一住・三住
乃至十住・等覺・妙覺の極果の蓮華を得るなり。

と

ほけきょう

ほん

もん

まさ

問う。法華経は、いずれの品、いずれの文にか、正しく
当体・譬喻の蓮華を説き分けたるや。

答う。もし三周の声聞に約してこれを論ぜば、方便の
品は皆これ当体蓮華を説けるなり。譬喻品・化城喻品に

は譬喻蓮華を説きしなり。ただし、方便品にも譬喻蓮華無き
にあらず。余品にも当体蓮華無きにあらざるなり。

問う。もししかば、正しく当体蓮華を説きし文はいず
れぞや。

答う。方便品の「諸法実相」の文これなり。

問う。何をもつて、この文は当体蓮華なりといふことを知ることを得るや。

答う。天台・妙樂、今の文を引いて今經の体を釈せし故なり。また伝教大師、釈して云わく「問う。法華經は何をもつて体となすや。答う。諸法實相をもつて体となす」文。この釈分明なり（當世の學者、この釈を秘して名を顯さず。しかるに、この文の名をば妙法蓮華と曰う義なり）。

また現証は、宝塔品の三身これ現証なり。あるいは涌出の菩薩、竜女の即身成仏これなり。地涌の菩薩を現証と

きょうもん

れんげ

みず

あ

い

なすことは、経文に「蓮華の水に在るがごとし」と云うが

ゆえ

ぼさつ

とうたい

き

りゅうによ

しようこ

故なり。菩薩の当体と聞こえたり。竜女を証拠となすこと

りょうじゅせん

もう

せんよう

れんげ

おお

しゃりん

かんのん

は、「靈鷲山に詣でて、千葉の蓮華の大きいさ車輪のごとく

ざ

と

ゆえ

みようおん

かんのん

なるに坐す」と説きたもうが故なり。また妙音・觀音の

さんじゅうさん

ししん

かいしゃく

ほつけざんまい

ふしき

三十三・四身なり。これをば、解釈には「法華三昧の不思議

じぎい

ごう

しょうとく

自在の業を証得するにあらざるよりは、いづくんぞ能くこ

さんじゅうさんしん

げん

うんぬん

うんぬん

せけん

そう

じょうじゅう

の三十三身を現ぜん」云々。あるいは「世間の相は常住

もん

みな

とうせい

がくしゃ

かんもん

なり」文。これらは皆、当世の学者の勘文なり。

にちれん

ほうべんぽん

もん

じんりきほん

によらい

しかりといえども、日蓮は方便品の文と神力品の「如來の

いっさい しょう ほう とう もん

もん

てんだいだいし

一切の所有の法」等の文となり。この文をば、天台大師も

これを引いて今經の五重玄を釈せしなり。ことさらこの

いちもん まさ しょうもん

なん

一文、正しき証文なり。

と つぎかみ ひ

問う。次上に引くところの文証・現証殊勝なり。何ぞ

もんしよう

げんしようしゅしよう

よ

じんりき いちもん しゅう

よ

神力の一文に執するや。

り。

と じんい

問う。その深意いかん。

こた

もん

しゃくそん

ほんけんぞく

じ ゆ

ぼさつ

けつちよう

答う。この文は、釈尊、本眷属たる地涌の菩薩に結要の

五字の当体を付囑したもうと説く文なるが故なり。久遠
完成の釈迦如來は、「我が昔の願いしところのごときは、
今、すでに満足しぬ。一切衆生を化して、皆仏道に入らし
む」とて、御願すでに満足し、「如來滅して後、後の五百歳
の中、広宣流布」の付囑を説かんがため、地涌の菩薩を召し
出だし、本門の当体蓮華を要をもつて付囑し給える文なれば、
釈尊出世の本懐、道場所得の秘法、末法の我らが現当にせ
二世を成就する当体蓮華の誠証はこの文なり。故に、
末法今時において、如來の御使いより外に当体蓮華の証文

し　い　　ひと
を知つて出だす人すべて有るべからざるなり。真実もつて
秘文なり。真実もつて大事なり。真実もつて尊きなり。
なんみょうほうれんげきよう　なんみょうほうれんげきよう　にぜん　えん　ぼさつとう　こんきょう
南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経爾前の円の菩薩等、今経
だいしゅはちまんあ　ぐそく　どう　ひら
に「大衆八万有り。具足の道を聞きたてまつらんと欲す」
うんぬん
云々、これなり。

と　とうりゆう　ほうもん　こころ　しょしゅう　ひときた　とうたいれんげ
問う。当流の法門の意は、諸宗の人來つて当体蓮華の
しようもん　とき　ほけきよう　もん　い
証文を問わん時は法華経のいづれの文を出だすべきや。
こた　にじゅうはっぽん　はじ　みょうほうれんげきよう　だい　もん　い
答う。二十八品の始めに妙法蓮華経と題す。この文を出
だすべきなり。

と

なに

ほんばん

だいもく

とうらいれんげ

問う。何をもつて、品々の題目は当体蓮華なりといふこと

し

う

ゆえ

てんだいだいし

こんきょう

しゅだい

しゃく

とを知ることを得るや。故は、天台大師、今經の首題を釈する時、「蓮華とは譬喻を挙ぐ」と云つて、譬喻蓮華と釈し給えるものをや。

たま

こた 答う。題目の蓮華は当体・譬喻を合説す。天台の今の釈

ひ ゆ

へん

しゃく

とき

しゃく

げんもんだいいち

ほんじやく

ろく

は、譬喻の辺を釈する時の釈なり。玄文第一の本迹の六

ひ

こころ

おな

だいしち

とうたい

へん

しゃく

譬は、この意なり。同じく第七は当体の辺を釈するなり。

ゆえ

てんだい

だいもく

れんげ

とうたい

ひ ゆ

りょうせつ

しゃく

故に、天台は題目の蓮華をもつて当体・譬喻の両説を釈す

ゆえ

とがな

るが故に失無し。

と なに だいもく れんげ とうたい ひゆがつせつ
問う。何をもつて、題目の蓮華は当体・譬喻合説すとい
うことを探ることを得るや。南岳大師も妙法蓮華經の五字
を釈する時、「妙とは、衆生妙なるが故に。法とは、衆生
ほう しゃく とき みょう しゅじょうみょう う なんがくだいし みょうほうれんげきょう ごじ
法なるが故に。蓮華とは、これ譬喻を借る」文。南岳・天台
しゃくすで ひゆれんげ れんげ ゆえ ほう しゃく たも ひゆ か もん なんがく しゅじょう
の釈既に譬喻蓮華なりと釈し給う、いかん。
こた なんがく しゃく てんだい しゃく うんぬん きょうもんふんみょう
答う。南岳の釈も天台の釈のごとし云々。ただし当体・
ひゆがつせつ てんだいすで てんじん りゆうじゅ ろん よ がつせつ ここる はんじやく
譬喻合説すといふこと、経文分明ならずといえども、
なんがく てんだいすで てんじん りゆうじゅ ろん よ がつせつ ここる はんじやく
南岳・天台既に天親・竜樹の論に依つて合説の意と判釈
するなり。

ほつけろん

い

みょうほうれんげ

にしゅ

ぎあ

いわゆる、法華論に云わく「妙法蓮華とは、二種の義有り。

いち
しゅつすい
ぎないしでいすい
い

もうもろ
しょうもん

一には出水の義乃至泥水を出ずるをば、諸の声聞の、

によらい
だいしゅ
なか
い
ざ

もうもろ
ぼさつ
れんげ

如來の大衆の中に入つて坐すること、諸の菩薩の蓮華の

うえ
ざ
もろもろ
ぼさつ
れんげ

上に坐するがごとくにして、

如來の無上の智慧・清淨の

きょうがい
とき
によらい
みつぞう
しよう

ちえ
しょうじょう

境界を説くを聞いて如來の密藏を証するに喻うるが故に。

に
けかい
によらい
しゅじょう
だいじょう
なか

たと
ゆえ
こころ

二に華開とは、諸の衆生、大乗の中において、その心

こうにやく
しん
しょう
あた

によらい
じょうみょう

怯弱にして、信を生ずること能わず。故に、如來の淨妙

ほつしん
かいじ
しんじん
しょう

ゆえ
じょうみょう
もん

法身を開示して、信心を生ぜしむるが故なり」文。

もちろも
ぼさつ
しょ
じ

ほつけいぜん
だいしよう

もうもろ

「諸の菩薩」の「諸」の字は法華已前の大今の諸の

菩薩、法華經に来つて仏の蓮華を得ること、法華論
の文分明なり。故に知んぬ、「菩薩、処々に入ることを得」
とは方便なり。天台、この論の文を釈して云わく「今、論
の意を解すれば、『衆生をして淨妙法身を見せしむ』と
言うがごときは、これは妙因の開発するをもつて蓮華とな
すなり。『如來の大衆に入つて蓮華の上に坐す』と言うがご
ときは、これは妙報の國土をもつて蓮華となすなり」。
また天台、当体・譬喻合説する様を委細に釈し給う時、
大集經の「我、今、仏の蓮華を敬礼す」という文と法華論

いま もん いんしょう しゃく い だいじゅう よ
の今の文とを引証して、釈して云わく「もし大集に依ら
ば、行法の因果を蓮華となす。菩薩の上に処るは即ちこ
れ因の華なり。仏の蓮華を礼するは即ちこれ果の華なり。
もし法華論に依らば、依報の国土をもつて蓮華となす。ま
た菩薩、蓮華の行を修するに由つて、報として蓮華の国土
を得。當に知るべし、依正因果ことくこれ蓮華の法な
り。何ぞ譬えもて顯すことを須いん。鈍人の法性の蓮華を
解せざるがための故に、世の華を挙げて譬えとなす。また応
に何の妨げがあるべき」文。また云わく「もし蓮華にあら

すんば、何によつてかあまねく上來の諸法を喻えん。法譬
なら わきまえ ゆえ みょうほうれんげ しよう

双べ弁ず。故に、妙法蓮華と称するなり」。

次に龍樹菩薩、大論に云わく「蓮華とは法譬並べ挙ぐる

なり」文。伝教大師、天親・龍樹の一論の文を釈して云

わく「論の文は、ただ妙法蓮華経とのみ名づくるに二種の
義有りと。ただ蓮華のみに二種の義有りと謂うにはあらず。
およそ法と喻とは相似たるを好しとなす。もし相似たらず

んば、何をもつてか他を解せしめん。この故に、釈論に『法
喻並べ挙ぐ』と。一心の妙法蓮華は、因華・果台、俱時に增長
ゆなら あ いつしん みょうほうれんげ いんげ かい ぐじ ぞうちょう ほう

す。この義解し難し、喻えを仮れば解し易し。この理を詮ずる教えを、名づけて妙法蓮華經となす」文。

これらの論の文、釈の義分明なり。文に在つて見るべし。包藏せざるが故に、合説の義極成せり。

およそ法華經の意は、譬喻即法体、法体即譬喻なり。故に、伝教大師、釈して云わく「今經は譬喻多しといえども、大喻はこれ七喻なり。この七喻は即ち法体、法体は即ち譬喻なり。故に、譬喻の外に法体無く、法体の外に譬喻無し。ただし、法体とは法性の理体なり。譬喻とは即ち妙法

じそう　たい　じそうそくりたい　りたいそくじそう　ゆえ
の事相の体なり。事相即理体なり。理体即事相なり。故に、
法譬一体とは云うなり。ここをもつて、論の文・山家の釈
は、皆、蓮華を釈するには、『法譬並べ挙ぐ』と等云々。
釈の意分明なり。故に重ねて云わず。
問う。如來の在世に、誰か当體の蓮華を証得せるや。
答う。四味三教の時は、三乘・五乗・七方便・九法界。
帶權の圓の菩薩ならびに教主、乃至法華述門の教主、總
じて、本門寿量の教主を除くの外は、本門の當體蓮華の名
をも聞かず。いかにいわんや、証得せんをや。

かいさんけんいち　むじょうばだい　れんげ　しじゅうよねん　あらわ
開三顯一の無上菩提の蓮華、なお四十余年にはこれを顯さず。故に、無量義經に「終に無上菩提を成ずることを得ず」とて、迹門開三顯一の蓮華は爾前にこれを説かずと云うなり。いかにいわんや、開近顯遠・本地難思・境智冥合・本有無作の当体蓮華をば、迹化の弥勒等これを知るべきや。問う。何をもつて、爾前の円の菩薩、迹門の円の菩薩は、本門の当体蓮華を証得せずということを知ることを得ん。答う。爾前の円の菩薩は迹門の蓮華を知らず、迹門の円の菩薩は本門の蓮華を知らざるなり。天台云わく「權教の

ふしょ しゃつけ しゅ し しゃつけ しゅ ほんげ しゅ し もん

でんぎょうだいしい じきどう だいじきどう

補処は迹化の衆を知らず、迹化の衆は本化の衆を知らず」文。

伝教大師云わく「これ直道なりといえども、大直道ならず」
云々。あるいは云わく「いまだ菩提の大直道を知らざるが故

に」云々、この意なり。

爾前・迹門の菩薩は、一分、断惑証理の義分有りといえ

ども、本門に対する時は当分の断惑にして跨節の断惑にあらず。未断惑と云わるるなり。しかれば、「菩薩、処々に入ることを得」と釈すれども、一乗を嫌うの時、一往の「入

ることを得」の名を与うるなり。故に、爾前・迹門の大菩薩

ほとけ れんげ しようどく
じゅりょう いっぽん き
ほんもん とき しんじつ
だんわく

は、寿量の一品を聞く時なり。の仏の蓮華を証得することは、本門の時なり。真実の断惑

てんだいだいし
天台大師、
ゆじゅっぽん
涌出品の
ごじつしょうこう
「五十小劫、
ほとけ
仏の神力の故に
じんりき
ゆえ
もろもろ
諸の

だいしゅ
はんにち
おも
もん
しゃく
い

「解者は短に即して長、五十小劫と見る。惑者は長に即して
けしゃたんそくちようごじつしょうこうみわくしゃちようそく

て短、たん半日のはんにちのごとしと謂えり」文。とも妙樂、もんみょうらくこれを受けて釈うしゃく

して云わく「菩薩すでに無明を破す。これを称して解とな

す。大衆なお賢位に居す。これを名づけて惑となす」文。釈

の意分明なり。爾前・迹門の菩薩は惑者なり、地涌の菩薩

のみ独り解者なりといふことなり。

ひと げしゃ

しかるに、当世天台宗の人の中に、本迹の同異を論ずる時「異なることなし」と云つてこの文を料簡するに解者の中に迹化の衆入りたりと云うは、大いなる僻見なり。経の文、釈の義、分明なり。何ぞ横計をなすべけんや。文のごときは、地涌の菩薩の五十小劫の間如來を称揚するを、靈山迹化の衆は半日のごとく謂えりと説き給えるを、天台は、解者・惑者を出だして、「迹化の衆は惑者なるが故に半日と思えり。これ即ち僻見なり。地涌の菩薩は解者なるが故

おも

すなわ

びやつけん

じゅ

ぼさつ

げしゃ

ゆえ

ゆえ

りょうぜんしゃつけ

しゅ

はんにち

おも

と たま

てんだい はんにち

なか

しゃつけ

ぎ

ふんみょう

なん

おうけ

もん

なか

しゃつけ

しゅい

い

おお

びやつけん

きょう

なか

こと

げしゃ

ひと

ひと

もん

とうせいてんたいしゅう

ひと

なか

ほんじやく

どうい

ろん

に五十小劫と見る。これ即ち正見なり」と釈し給えるなり。妙樂、これを受けて、「無明を破する菩薩は解者なり。」まだ無明を破せざる菩薩は惑者なり」と釈し給いしこと、文に在つて分明なり。「迹化の菩薩なりとも、住上の菩薩はすでに無明を破する菩薩なり」と云わん学者は、無得道の諸経を有得道と習いし故なり。

爾前・迹門の当分に妙覺の位有りといえども、本門寿量の真仏に望むる時は、「惑者」「なお賢位に居す」と云わるる者なり。權教の三身いまだ無常を免れざる故は、

むちゅう こぶつ ゆえ
夢中の虚仏なるが故なり。

にぜん しゃつけ しゆ
爾前と迹化の衆とは、 いまだ本門に至らざる時は未断惑
もの い
ひと ときまき
とよじゅう かな
ほんもん いた
とき みだんわく
いた
しょじゅう
かな

みようらく しゃく
妙楽、 祀して云わく 「迹を開き本を顕せば、 皆初住に
い もん
けんい こ
しゃく ひら ほん
あらわ
みなしょじゅう
ひと
しょじゅう
かな

い
にぜん しゃつけ しゆ
入る」 文。「なお賢位に居す」 の 祀、 これを思い合わすべ
し。 爾前・迹化の衆は、 惑者にして、 いまだ無明を破せざ
る仏菩薩なりといふこと、 真実なり、 真実なり。
しゅ
ゆえ し
みな
ほんもんじゅりよう せつあらわ
のち
りょうぜんいちえ
とうたいれんげ しようとく
にじょう
せんだい

故に知んぬ、 本門寿量の説顯れての後は、 靈山一會の
衆、 皆ことごとく当體蓮華を証得するなり。 二乘・闡提・
しゅ
ゆえ し
みな
ほんもんじゅりよう せつあらわ
のち
りょうぜんいちえ
とうたいれんげ しようとく
にじょう
せんだい

じょうしょう によにんとう あくにん ほんぶつ れんげ しょうとく
定性・女人等の悪人も、本仏の蓮華を証得するなり。
でんぎょうだいし いちだいじ れんげ しゃく ほつけ かんじん
伝教大師、一大事の蓮華を釈して云わく「法華の肝心、
いちだいじ いんねん れんげ しょけん いち いちじつそう だい
一大事の因縁は、蓮華の所顯なり。一とは一実相なり。大と
しようこうはく ほつしよう じ いちくきょううじ えん り
は性広博なり。事とは法性の事なり。一究竟事は円の理・
ちぎょう えん しんにやだつ いちじょう さんじょう じょうしよう ふじょうしよう
智・行、円の身・若・脱なり。一乘・三乘、定性・不定性、
ないどう げどう あせん あてん みな いつさい ちじ
内道・外道、阿闍・阿顛、皆こどごとく一切智地に到る。
いちだいじ ほとけ ちけん かい じ ごく にゅう いつさいじょうぶつ
この一大事、仏の知見を開・示・悟・入して一切成仏す
もん によにん せんだい じょうしよう にじょうとう ごくあくにん りょうぜん
文。女人・闡提・定性・二乘等の極悪人、靈山において
とうたいれんげ しようとく
当体蓮華を証得するを云うなり。

と

問う。末法今時、誰人か当体蓮華を証得せるや。

とうせい てい み だいあびじごく とうたい しようとく
こた おお ひと ひとけ れんげ ひと な

答う。当世の体を見るに、大阿鼻地獄の当体を証得する

ひと

ひとこれ多しといえども、仏の蓮華を証得せるの人これ無

ゆえ

むとくどう

ごんきょうほうべん

しんこう

ほつけ

とうたい

し。その故は、無得道の權教方便を信仰して法華の当体

ひと

れんげ

きぼう

ゆえ

ひとけと

のたま

ひと

し。眞実の蓮華を毀謗するが故なり。仏説いて云わく「もし人

ひと

きよう

きぼう

ゆえ

ひとけと

のたま

すなわ いつさいせけん

ぶっしゅ

ひと

し。信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断

ないし

ひと

みょうじゅう

きよう

い

もん

てんだいい

ぜん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」文。天台云

きよう

りくどう

ふっしゅ

ひら

きよう

わく「この経はあまねく六道の仏種を開く。もしこの経を

ぼう

ぎ

だん

あ

もん

にちれん
い

きよう

謗ぜば、義、斷に当たるなり」文。日蓮云わく、この経は

じっかい つう ぶっしゅ きょう ぼう ぎ
これ十界に通じて仏種なり。もしこの經を謗ぜば、義これ
十界の仏種を断ずるに当たる。この人無間において決定し
て墮在す。何ぞ出ずる期を得んや。

にちれん いちもん しょうじき ごんきょう じやほう じやし
しかるに、日蓮が一門は、正直に權教の邪法・邪師の
じやぎ す しょうじき しょうほう しょうし しょうぎ しん
邪義を捨てて、正直に正法・正師の正義を信ずるが故に、
とうたいれんげ しようとく じょうじやつこう とうたい みょううり あらわ
当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顯すことは、
ほんもんじゅりよう きょうしゅ きんげん しん なんみょうほうれんげきょう とな
本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱うる
ゆえ が故なり。

と なんがく てんだい でんぎょうとう だいし ほけきょう よ いちじょう
問う。南岳・天台・伝教等の大師、法華經に依つて一乘

えんしゅう きょうほう ぐつう たも
円宗の教法を弘通し給うといえども、いまだ
なんみょうほうれんげきょう とな
南無妙法蓮華經と唱えたまわざるは、いかん。もししから
だいしどう とうたいれんげ し しようと
ば、この大師等はいまだ当体蓮華を知らず、また証得した
まわづと云うべきや。

こた なんがくだいし かんのん けしん てんたいだいし やくおう けしん
答う。「南岳大師は觀音の化身、天台大師は藥王の化身な
とううんぬん
り」等々云々。もししからば、靈山において本門寿量の説を
とき しょうとく
聞きし時はこれを証得すといえども、在生の時は妙法
るふ とき ゆえ みょうほう みょうじ か しかん ごう
流布の時にあらず。故に、妙法の名字を替えて止觀と号し、
いちねんさんぜん いつしんさんがん しゆ たま
一念三千・一心三觀を修し給いしなり。ただし、これらの

だいしどう なんみょうほうれんげきよう とな

とな

じぎょうしんじつ ないしよう

ないしよう

大師等も南無妙法蓮華経と唱うることを自行真実の内証

おぼ

と思しめされしなり。

南岳大師、

法華懺法に云わく

「南無妙法蓮華経」文。

天台大師云わく

「南無平等大慧

一乘妙法蓮華経」文。

また云わく「稽首妙法蓮華経」云々。

また「帰命妙法蓮華経」云々。

伝教大師、最後臨終の

十生願の記に云わく「南無妙法蓮華経」云々。

と
なん

と

もんしょふんみよう

なん

ぐつう

ざるや。

こた

にいあ

いち

とき

いた

ゆえ

答う。これにおいて二意有り。一には時の至らざるが故に、

に

ふぞく

ゆえ

みょうほう

ごじ

まっぽう

二には付囑にあらざるが故なり。およそ妙法の五字は末法
るふだいびやくほうじゆせんがい　　だいじふぞく
流布の大白法なり、地涌千界の大士の付囑なり。この故に、
なんがくてんだい　でんぎょうとう　うち　かんが
南岳・天台・伝教等は内に鑑みて、末法の導師にこれを譲
つて弘通し給わざりしなり。

ぐつう

たま

ゆず